家

妹明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家

【Ｎコード】
Ｎ１９８６Ｒ

【作者名】
妹明

【あらすじ】
最初はただ数日泊めてもらうだけのつもりだった。
でも……

昼でも薄暗く、人通りなどほぼ皆無の森の奥深く、寝床も仕事もない俺は、当分の寝床してこの辺りに場所に仮家を作ろうとした。
だが、その前にとあるものを見つけた。
「……家？」
酷く歪(いびつ)で隙間だらけだけど、屋根も壁も木で出来ているちょっと大きめの家が少し開けた場所にあった。
（おかしいな。ここに人なんか来るはずないんだけどな……）

試しに家の前に行ってみた。ドアまでしっかりあった。
が、人がいる様子はない。
ノックをしてみる。
……反応が返ってこない。
少しドアを開けようとした時にようやく人の声がした。
「あの、ボク、家がないんです。良ければ少しの間、泊めてくれませんかぁ？」
ドア越しにザワザワと話し合う声。
やがて、その声も止み、ドアが開いた。
ギギィという音を立てながら、出てきた人は、子供だった。
「どうぞ」
若干、怖がってる様子で子供は話した。

中に入ると、１０人近くの子供たちがいた。
みんな、知らない奴が入ってきて警戒心と怯えの目でこちらを見ている。
希望なんてどっかに置き忘れてしまったかのような目だった。

「君たち、どうしてこんな山奥に？」
大人しそうな少年が小さな声で呟くように言った。
「理由は貴方と同じ。家がないからだよ」
「ここにいる子供は皆、親に捨てられて、孤児院でも虐められて、逃げてきた弱い奴らなんだ」
気の強そうな少年があとに続いて喋った。
「弱いって……」
「お兄さんお仕事あるの？」
今度は少し小さい少女が口を開く。
「今捜してる」
「そか」
興味なさそうに生返事をし、小さい子供の面倒を見始めた。
「ねぇ。家に泊らせて欲しいと言っていたよね」
「あ、ああ」
「いいよ。別に」
その少年の発言に、小さい子供たちはざわつく。
「ただし、条件があるんだ」
「なんだ？」
「絶対。仕事を見つけてこい。そして、ここに住むんだ。こいつら全員養え」
「じゅ、１０人もいる子供を養える程って……」
「大丈夫。野菜の種とか買えるくらい稼いできてくれれば。頑張ってよ。お兄さん」
子供たちをなだめつつ、少女が笑った。
「う……」
断るに断れないその状況だった。

次の日の朝。俺は早速仕事探しをする為に街へと出かける準備をしていた。

「あ、お兄さん。これ。今日は寒いから」
そう言ってマフラーを手渡された。
「ありがとう」
「ううん。いいの。それより、お仕事頑張って探してきてね」
「うん。じゃぁ行ってくるね」
「いってらっしゃい」
少女がそう言うと数珠繋ぎの様に次々と幼い子供たちが行ってらっしゃいと叫ぶ。
急に、ちゃんとしなきゃって言う自覚に襲われた。

結局その日の収穫は何もなく。ただ悪戯に時間を浪費しただけだった。
帰ったら何言われるんだろう？　出てけとか言われたら、どうしよう……。
そんなこと考えつつ、部屋のドアを開ける。
「ただいまぁ～」
「お帰り。仕事は？」
期待しているらしく、目を輝かせながら聞いてくる。
申し訳ない気分に襲われながらも無言で首を横に振る。
子供たちから、ため息の声が一気に聞こえてくる。ああ、ヤバい。
「ま、どうせそんなこったろうと思ったよ」
「きにすることないよ。またあした、頑張ればいいし」
「そうだよ！　ぼくたちも協力するし」
「だから、そんな顔しなくてもいいよ」
みんなの優しい言葉に、不意に涙がこぼれた。
「ちょっと、泣くことないじゃん！」
「どうしたの？　どっかいたいの？」
「いたいのいたの、とんでけー！」
心配そうにみんなが駆け寄ってくる。それにまた感動して涙が落ち

る。
「ありがとう……、ありがとうぅ……。俺、明日からも頑張るから……」
「みんなでがんばろう」
数年ぶりに、人の優しさに触れて、体の真ん中らへんが暖かくなるのを感じた。

仕事が見つかったのは、家に住まわせてもらってから、一ヶ月後のことだった。
その間一切、出て行け。とかそういう類の言葉は言われずにみんな一様に
明日があるじゃん。頑張ればいいじゃん。って優しい言葉をかけられる。
俺はそれが嬉しくて……少し申し訳なくて……。
人間ってこんなにも助け合えるんだって、衝撃的でもあった。
この街に来てから、そんな人情だとか、優しさだとかに触れた記憶がなかったから、それは普段にも増して濃いものとなっていた。

「俺は、みんなに感謝しなきゃいけないな」
飯の途中にポロッと口に出していた言葉。
「なんで？」
「みんなには、迷惑かけてばっかて、飯も、寝床まで提供して貰ってるのに、俺は……」
「お兄さんはいつもお礼の言葉ばっかり喋ってるよね？」
少女がスープを飲みながら言う。
「え……？」
「あたしたち、お兄さんにはいつも感謝してるんだ」
「！」
「あたしたちの為に毎日、朝から晩まで死に物狂いで働いて。少し

でも生活を楽にしようと……」
「そ、そんなつもりじゃ……」
「貴方が思ってる以上に恩返しはできてるって言いたいんだ。気持ちくらい。受け取ってよ」
「……」
まただ……。また、優しさで涙が零れだした。
「お兄さんは本当に泣き虫だなぁ」
みんな楽しそうに笑ってる。
出会った日には全く見せなかった純粋な笑顔だ。
それにつられて、涙でぐちゃぐちゃの顔で笑う。

「お兄さん、やっと笑ったね」

俺は幸せ者だ。

守る為の物もある。

生きる意味がある。

それだけで、いいんだ。

今日も、俺には帰る家がある。

（後書き）

大したことも何も出来やしないけど、
私は私なりの方法で、
伝えるから。

自分らしく。
周りに囚われず。
大切なことは、
人それぞれ違うから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1986r/

家

2011年10月6日16時12分発行